

# 「ハムレット」のアイロニー

——「魚屋のシーン」の場合——

大 山 俊 一

まずアイロニーとは何かという抽象的な議論で始めることは避けた方が賢明だろう。アイロニーの定義については、相手の論理を打ち破るために無知を偽装したソクラテスのアイロニーから、インギンにしてその実きわめて無礼な現代ふうの意味のアイロニーにいたるまで、一応の定義は辞書その他で容易に見いだすことができよう。しかしこれはあくまでも辞書的な定義にとどまり、文学的ないしはドラマティックなアイロニーの実際においては、こういう定義は実は無きに等しいといえる。何故ならばアイロニカルな心的態度というもの进行分析してみると、多くの場合そこには実に数多くの複雑な要素が見いだされ、これを機械的に、一筋なわで概念規定をすることはほとんど不可能であり、またそうすることは美しくも織りなされたアイロニーのあやを、全面的にそこなうことである。すぐれた文学的なアイロニーの生命は、多くの場合その無限の多様性にある場合が多い。したがって「ハ

ムレット」のアイロニーというような一般的な、抽象的なものは実は存在せず、実際にあるのは「ハムレット」のアイロニーズ (ironies—複数形) だけであるということが出来る。したがって「ハムレット」のアイロニーというような日本語的な言い方、考え方はアプローチとしては実は逆で、より厳密には「ハムレット」におけるアイロニカルな態度 (複数) というふうに言わなければならない。そしてその態度自身にしても、主人公ハムレットを中心とした作中の登場人物の立場、それらの相互反響の面、劇場における観客の立場、作者シェイクスピアの立場等々というように、実にいろいろのレヴェルのものが考えられる。こういう各種各様のレヴェルのアイロニーが無限の多様性を以て有機的に結び合い、ここに「ハムレット」独特の悲劇的主題、雰囲気織りなされている。各種各様のレヴェルと言ったが、これらが全体的主題を構成するのに果す役割については、その優劣はここでの

わかに、機械的に決めるわけにはゆかない。しかしながら「ハムレット」全体の悲劇的な主題との密接な連関を見いだすという観点からすれば、われわれはまず主人公ハムレット自身の立場について考えるのが最も妥当である。ハムレットのアイロニカルな態度には、いかなる要素が見いだされるだろうか。それが作全体の悲劇的主题といかなる結びつきをしているだろうか。アイロニーとは意図することと正反対のことを言う言い方、というのがアイロニーの最も常識的な定義と言えるだろうが、ハムレットのアイロニーは果してこの枠内に十分入っているのか。全然はみ出しているのではないか。枠に入るとか、はみ出すとか言ったが、その枠という考え方自体がそもそも問題なのではないか。

ハムレットのアイロニーが最も痛烈なヒットとなるのは、総理ポロニアス、国王クロードディアス、王妃ガートルードなどに対するものであるが、なかでも対クロードディアスのアイロニーはすさまじい。二幕二場、一七一―二二〇行のいわゆる「魚屋のシーン」(Fishmonger Scene) はその最もよい例の一つである。「ハムレット様、この私奴を御存じです。」というポロニアスの問いに、「大変よく知っています。あなたは魚屋だ」という、ポロニアスにとっては全く唐突にして、不可解なハムレットの答えに始まるこのシーンで、ポロニアスは徹頭徹尾ハムレットに愚弄されている。もともとポロニアスはエリザベス朝人のすべてが持っていた言葉というものに対する強烈な熱情を具現したような男で、当意

即妙の機知問答は彼の最も得意とするところであり、こと修辭学に關してはおのれの右に出るものは無いという自負心を持ってゐる。そのポロニアスの才覚を以てしてもハムレットの真意は全く測りかねるのだ。ハムレットのこのあたりの一連の言動は、狂気の沙汰といえればたしかに狂気の沙汰だ。しかしその中には論理のひらきがあるといえ、それまたしかにある。ポロニアスのハムレットの実状認識はこのあたりでは一步の進展もなく、彼は完全にお手あげである。ここはさつきと切りあげて、最後の切り札、娘オフィーリアを使って真相を一挙に明らかにするよりほかにはない。ポロニアスはハムレットの面前から退出しようとする。

ポロニアス … ハムレット様、私奴これにておいとまを  
いただくたく存じます。

ハムレット 何であげずにおきましょう、それ以上手離したいと思うものはほかにはない。この命を除いては、この命を除いては、この命を除いては。

(Polonius. … My honourable lord, I will most  
humbly take my leave of you.)

Hamlet. You cannot, sir, take from me any  
thing that I will more willingly part withal;  
except my life, except my life, except my life.)

ハムレットの言葉を直訳すれば、「それ以上わたしが心から手離したいと思つてゐるほかの何物をも、あなたはわたしからとることはできない、わたしの命を除いては、わたしの

命を除いては、わたしの命を除いては」ということになるが、さらに邦語のイデオムに端的にのせれば、「願ってもないこと、さっきからそれを待っていました。いっその命をさしあげたい、この命を、この命を」というふうを意識することもできるかもしれない。要するに「退出のゆるしどころか、一番お前にやりたいのは、ほかならぬこの命だ」というのがハムレットのこのあたりのアイロニーのポイントであると言える。

しかしハムレットは「命をやろう」と単刀直入に言っているのでは決してない。あくまでも彼は「おれの命を除くすれば、お前の求めるいとま以上にこのおれが心から手離したいと思つてゐるものはほかにはないのだ」と言つてゐるのである。そしてこのわざわざまわりくどい言ひ方をしてゐることが実はこのあたりのポイントなのだ。つまりこれがとりも直さずこのあたりのハムレットのポロニアスに対する根本的な態度である。ポロニアスは事の白黒をはっきりとつけたい。ところがハムレットの側から考えれば絶対にそうしてはならない。ハムレットの狂気を中心とした事態の真相は、あくまでもエルシノア城の霧の中にとじこめておかなければならない。そこには何の進展もあつてはならない。そうすればおせっかいなポロニアスのことだ。しびれを切らして何等かの行動に出るに違ひない。ハムレットのねらいがそこにある。そこでハムレットは故意に「命をやろう」とは言わないで「おれの命を除いては……ほかにはない」というような、否

定を含めた反語的な言ひ方をして、われわれを含めてポロニアスをしてあえて論理の宙返りをやらせるのだ。しかも「おれの命を除くして」は文章の終りに付けられて三度繰り返され、「except my life, except my life, except my life」は半ば独立した文章のように扱われているのだ。いま論理の宙返りをやらされたばかりのわれわれにとつては、そしておそらくはポロニアスにとつても、この「おれの命を除いて」の真意はそうたちどころにわかるものではない。いったいハムレットは命をやると言つてゐるのか、やらぬと言つてゐるのか。ハムレットの言葉づかひは“sit”でわかるように、うわべはあくまでもプリンスにふさわしい形式とインギンキを持つてゐる。しかし“except my life, except my life, except my life”と言つたのに合わせて、ただならぬ形相のハムレットに三歩つめ寄られてはポロニアスたるものあわてざるを得ないではないか。

ここであわてるのはポロニアスばかりではない。現に最近出た邦訳の一つも、「命はやらぬ、命はな、命はやらぬぞ」と訳している。誤訳と言えば誤訳だが、誤訳でないとも言える。つまり極端な言ひ方をすれば、ハムレットにとつてはこれは「命をやる」でも「命をやらぬ」でも、要するにどっちでもよい。要はポロニアスに訳のわからぬ脅威を与えればそれでよいのだ。ハムレットはポロニアスというコマをまわし続けておけばそれでよい。そのコマが何処へとんでゆくかは、おせっかいなポロニアスのことだ、おそらくは自分

自身で決めるだろう。

ところで問題は「命をやる」だ。ハムレットにとつては「やる」でも「やらぬ」でも、どっちでもよい問題だが、ポロニアスにとっては大問題である。「命をやる」と「やらぬ」とでは大變な違いである。方程式を一つ省略したような「You cannot」の言い方をされても、頭のよいポロニアスのことだ「except my life」が「おれの命をやろう」と同じことだということぐらいわからぬ筈はない。それまではわかる。しかし問題はそれからだ。まずアイロニーのふつうの意味で考えれば、ハムレットの「命をやる」の真意はその反対の「命をやらぬ」である。ハムレットは何等かの徴候によつて、あるいはその鋭敏な直覚力によつて、ポロニアスがクサイことをすでに知っている。娘オフィーリアをオトリに使おうとしていることもすでに知っているかもしれない。王クローディアスと共犯かもしれない。おのれ憎い憎い、おしゃべりでおせっかい屋のポロニアス奴！ お前などと話をしているのは死ぬほど退屈だ。早く消えて失せろ！ お前が退散してくれるというなら何でもやるぞ。この命をやるぞ！ ハムレットの「命をやる」は「さっさと消えて失せろ！」で文字通り「命をやる」では決してない。「Except my life」はポロニアスにとつては「命をやる」どころではない。ぐずぐずしているとポロニアスよ、「お前の命を貰うぞ、お前の命を、お前の命を」となるのだ。ハムレットの大胆な脅迫であり、挑戦である。

それにしてもハムレットのアイロニーは余りにも激烈であり、余りにも唐突すぎる。第三者的に状況判断をすれば、このあたりの状況ではどう考えてみても「命をやる」「やらぬ」は穩当な言動とは言い難い。ここにはもちろん、このシーンの冒頭の「あなたは魚屋だ」から続いている狂気の偽装がある。ハムレットのポロニアスに対する挑戦はあくまでも大胆でなければならぬ。ポロニアスがたじろぐ隙に、その企図が察知できるかもしれないからだ。しかし自己の計画の秘密保持についてはあくまでも慎重でなければならぬ。そのためにはことさらに不穩当にして唐突な言動もあえてする必要がある。かくして娘オフィーリアもすでに伝えたハムレット発狂の知らせは、ポロニアスにとつては完全に既定事実となり得る。とにかくポロニアスは一つのことを、こうと思つたが最後それを絶対に交えることをしない男であり、そういう年輩でもある。「殺す」の「生かす」のと不穩当にして辻褃の合わぬ言辞を弄すれば弄するほど、可哀そうにハムレット様は娘オフィーリアに愛を拒絶されたために発狂されてしまった、とポロニアスはますますその確信を深めるに相違ないのだ。二人の子の親としてのポロニアスにとつては、自己の榮達もさることながら、二人の子供はそれ以上の生甲斐である。ことに末娘オフィーリアは年老いた彼の生命であり、希望である。彼のハムレットに示される関心は、実は娘オフィーリアに対する愛情なのである。ポロニアスがハムレットを見る眼は、実は娘オフィーリアに対するやさ

しい愛のまなぎしであり、そしてそれはとりもなおさず、年  
老いたポロニアスが自分自身をいとほしむ姿でもあるの  
だ。ここにハムレットの直感的な計算があったと言えるだろ  
う。かくしてポロニアスは彼自身も言っているように、ハ  
ムレットは果して正気なのか狂気なのか皆目見当がつかず、  
ハムレットのペースに完全に乗せられてしまうのだ。

ポロニアスをこのように思うままに手玉にとったハムレ  
ットの満足感はある。それにはこのあたりの彼のセリ  
フが、いささかのよどみもみせていないことでもよくわか  
る。彼の高揚した気分を調子を合せて、彼の頭脳の回転も快  
調そのものだ。ハムレットは計画が成功すると、よく病的  
なほどにはしゃぐ。たとえば一幕五場の「地下のシーン」  
(Cellarage Scene) や、三幕二場で劇中劇が上首尾に終っ

た後のハムレットの言葉などにそれがよくあらわれている。  
このあたりのハムレットの気分がまさにそれである。機知、  
アイロニー、ヒューマールが口をつけて出て、文字通りとどま  
るところをしない辯舌のさわやかさである。しかしこの明  
快な気分、さわやかな辯舌も実はうわべだけのものなのであ  
る。これを一皮はげばその下には、重苦しい暗黒の世界がど  
んよりとよんでいるのだ。ハムレットの病的なまでののはし  
やぎぶりは、たとえば悲劇の死の苦悩に間歇的にあらわれる  
笑いのけいれんとでも言えるだろうか。表面では得意満面の  
ハムレットの言葉の一つの底流をなしている一連のイメジに  
注目してみよう。「魚屋」問答に次いで、「犬の屍骸」う

じ虫」のイメジが出てくる。次いでハムレットの読んでいる  
本の内容に及び、醜悪な「老衰」のイメジが出てくる。それ  
から「墓」である。いまここで問題にしている「命をやる  
ぞ」はこの「墓」のイメジに続いているようだ。これらの不  
吉なイメジの一つには、ポロニアス脅迫の目的で使われて  
いることはもちろんである。しかし単に脅迫だけが目的な  
ら、もっと適切なイメジがほかにあるだろう。これらの不  
吉な、すべて否定的な価値の一連のイメジは、つまりはハム  
レットの心理の内側に、無意識のうちに底流となっている彼  
の絶望感を具体的に、はっきりと表現するものにはかならな  
いのだ。ハムレットをとりまくあらゆるものがすべて否定的  
なものであることは、ハムレット自身がすでによく知ってい  
る。エルシノアの城壁の夜は寒く不気味である。デンマーク  
の国は悪名を天下にとどろかしている。その中心は問題の国  
王クロードニアスである。それを援けるポロニアス、国王  
の犬のギルデンスターンとローゼンクランツ、オフィーリア  
の行動もどうやらおかしいし、母親のガートルードももしか  
すると……。ハムレットをとりまく世界は完全に「関節が外  
れている」(“The tince is out of joint” — I. v. 188) のだ。  
すでにハムレットは最初の独白で自殺を考えている。

おお、この余りにもけがれにけがれたからだ、  
いっそ一思いに溶けて露になってしまえばいい！

さもなければ永遠なる神が自殺を禁じ給うた

おきてを御決めになつていなかったら！神よ、神よ！

この世のならわしはどれもこれも、何とたいくつで、平凡、無味乾燥、しかも役にたたぬものなのか！ちぎっ！バカバカしい！まるで雑草をぬかずに実るにまかせた庭だ。下劣で、けがらわしいものがわがまの顔に生じげつてゐるのだ。

(O that this too too sullied flesh would melt,

Thaw and resolve itself into a dew;

Or that the Everlasting had not fix'd

His cannon 'gainst self-slaughter! O God! O God!

How weary, stale, flat and unprofitable

Seem to me all the uses of this world!

Fie on't! ah, fie! 'tis an unweeded garden,

That grows to seed; things rank and gross in

nature

Possess it merely.)

(I. ii. 129—137)

それから余りにも有名な三幕一場の例の "To be, or not to be" のモノローグでも、ハムレットが一応は自殺のことを考へているのは明らかである。ハムレットと自殺という点に関しては、まだ今後解明されなければならない問題が残されていると思われるが、これらのモノローグに流れている厭世感が、このあたりの一連の不吉なイメジと関連があることはたしかである。表面ではポロニアスを完膚なきまでにいためつけながらも、ハムレットの心の中はどのようにもやるせない厭

世感と骨をかむような虚無感、絶望感。この連想では "except my life" はアイロニーでも何でもなく、「いとまごころではない、いまお前に一番やりたいのはほかならぬこの命だ、さあ命をやろう！」というハムレットの心からの死への願ひとなる。「命をやらぬ」「お前なんか命をやったまゝのものか」に対して、「命をやろう」「いっそ死んでしまいたい」というおよそ正反対の意味が強く表面に出てくる。およそ無関係に見えながら、しかもこれら相反する二つの意味はここでは完全に、何の矛盾もなく結びついている。光と影が同一物の両面を示す如く、いずれもハムレットの心の中という一つの真実を伝えているのだ。

それにしても、ハムレットのこういう複雑なアイロニカルな態度にはハムレットの芝居、演技性というものが感じられないだろうか。そういうものは絶対にはないと言えば、たしかにそうとも言える。これこそハムレットの心情の直接的な表現であって、この張りつめたロープの上をわたるハムレットにとって演技をする余裕は絶対にはあり得ない。そして主として主人公ハムレットの立場にたつて芝居を見るわれわれ観衆、または芝居を読むわれわれ読者も、同様にハムレットと共にロープをわたっているのである。しかしながら芝居、劇場のリアリズムの特異性は、われわれが劇場でハムレットとなり得るのは、われわれが現実の日常生活でわれわれ自身になり得ると、全く同じではないということである。劇場においてはわれわれ観衆はハムレットの主観に立ちながら、し

かも同時にハムレットを客観視し得る。われわれはハムレットと共にロープをわたりながら、同時にわれわれはハムレットの綱わたりをながめることができる。この場合われわれはハムレットのいささかの演技にも敏感である。この点で「ハムレット」全体を通じて主人公ハムレットの言動には、常に相当の演技性があることをわれわれ観衆の感覚は認めないわけにはゆかない。このことについては多くの批評家達によって言及されてきたが、たとえば有名な「尼寺のシーン」(Nunnery Scene)で、たとえどのような理由があるにせよ、かりそめにも今の今まで心から愛していたオフィリアに、突如として「尼寺へ行け！」は少々ひどすぎるではないか。当時「尼寺」には淫売宿の意味もあったのだ。彼女が父親のポーロニアスに加担さえしなければハムレットの愛情は少しもかわらなかつたろう。あるいはハムレットが浴びせるこういう罵言は、実はいわゆる可愛さ余つてのことで、これこそ心の中では依然として彼がオフィリアを愛し続けている証拠であるかもしれない。いずれにしてもハムレットのオフィリアに対する愛情というものを考えるとき、彼のこのあたりの執拗な罵言の繰り返しには、われわれは何か感覚のわだかまりを感じないわけにはゆかない。ハムレットは「尼寺へ行け！」というわれながらうまいセリフに完全に酔っているのではないか。「尼寺へ行け！」というセリフが一度口から出てしまうと、ハムレットはこんどは逆にそのセリフに動かされて、その心にもない演技をとめどもなしに続け

てゆくのではないか。彼は「尼寺へ行け！」を僅か三十行余りのあいだに五度も繰り返しているのだ。

これは一つにはハムレットという人の性質によるだろう。彼はレイアーティーズに比べればおよそ比較にならぬほど、激情というものには動かされぬ冷静な人である。彼は友人ホレイシヨを、一つにはお世辞でもあるが、「感情と理性」とが均衡を得た理想的な人間として賞讃している。このことはとりもなおさず彼自身が常にそういう点で内省しているということを示すものであろう。ハムレットはいずれかと言えどもちろんホレイシヨのバランスを得た人間像に近く、単なる「激情の奴隸」(“passion's slave”-III. ii. 73)などでは決してない。しかしそれならば彼は激情というものから完全に自由であるかという点と必らずしもそうではない。最初のモノローグの有名な「弱きものよ、汝の名は女なり」は母ガートルードの早急な再婚からの彼の結論であるが、冷静な論理性を欠いたいかにも早急な結論であると言わざるを得ない。前述の「尼寺のシーン」の彼の言動は、環境次第では彼も激情の流れにおちこむこともあり得るといふいい例である。その他全篇を通じて、彼がおかれた悲劇的な環境もさることながら、彼の性質自身が激情の方に傾き易いことを示す例は、ほとんど枚挙にいとまがないといつてよい。ハムレットがホレイシヨのバランスを羨望視しているのは、時として彼が「激情の奴隸」となる可能性があることを、彼自身よく知っていることを示しているとも言える。激情は他の激

情をよび、いきおい言動は大ゲサとなり、この連鎖反応はやがてハムレットをして時として心にもない芝居を演じさせてしまうのだ。ハムレットのアイロニカルな言動には、いつもこういう演技性が付きまといてゐるようだ。いまここで考えている「魚屋のシーン」、「命をやる」セリフにしても、ハムレットのこういう芝居の要素を除外して考へるわけにはゆかない。

「ハムレット」にはもともと「劇中劇」のシーンをはじめとして、芝居との関連、芝居に関する言及が非常に多い。宮廷にやってきた役者がトロイの王プライアム終焉の場のセリフを披露するのを聴いたあと、ハムレットはモノローグで次のように自分の無気力を慨嘆してゐる。

ああ、何というやくざ、奴隷を食なのか、このおれは！  
全く歎かわしい限りだ、あの役者を見よ！  
たかが単なる作りごと、さらごとにすぎないものを、

全くの事実、真実と心の底から思いこみ、  
顔は血の氣を失くし、目には涙をうかべ、  
なりふり乱して、声もとぎれとぎれ、  
することなすこと、すべて役柄にピタリだ。

しかもぜんたい何のために？ 何も無いではないか！  
王妃へキューバのためにか！

しかるにこのおれは、  
全々やる氣のない、ろくでなしのやくざで、

おのれの大事は忘れ果て、こきこきと居眠り同然、  
物一つ言ひごとくもせぬなり。

(O what a rogue and peasant slave am I!  
Is it not monstrous that this player here,  
But in a fiction, in a dream of passion,  
Could force his soul so to his own conceit  
That from her working all his visage wann'd,  
Tears in his eyes, distraction in's aspect,  
A broken voice, and his whole function suiting  
With forms to his conceit? and all for nothing  
For Heutba!

Yet I,

A dull and muddy-metled rascal, peak,  
Like John-a-dreams, unpregnant of my cause,  
And can say nothing.) (II. ii. 558—577)

もちろん行動、行動と云うことを絶えず念願してゐるハムレットにとつては、この言葉は正しい。しかしながらハムレットの演技めいた言動にたびたび接したわれわれにとつては、これはいささかアイロニカルな含蓄を持つてゐると言わざるを得ない。「物一つ言ひごとくもせぬなり」ところではなから、激情のおもむくところ、時としては彼の思考は論理を超越して早急な結論にはしり、この世のごく些細な事柄をも契機として彼の思考は全宇宙三界の一般論に及び、文字通り「舞台



を涙で濡れさせ、全観衆の耳を恐怖にみちたセリフでつん裂く」(五七一―二行) ことも再三である。このレヴェルのアイロニカルな含蓄を不当に過大視することは、もちろん避けられなければならない。おそらくはこれを指摘すること自体が不要であるかもしれない。これは作者シェイクスピア自身のレヴェルのアイロニーである。「魚屋のシーン」の底流の一つとして、こういうアイロニカルな含蓄が流れていないとは言えず、「命をやるう!」の一つのセリフにも、その背後の背後の方にこういう含蓄の影がさしこんでいないと断定することはできない。

本を読みながら登場してきたハムレットに、ポローニアスは「ハムレット様、私奴を御存じで?」と訊ねるのだが、ハムレットにとってこれほど人をバカにした言葉はあるまい。ハムレットをはじめから狂人扱いにしているのだ。しかし間違いを看板にしているハムレットにとっては、これは思いつつボだ。ぐっとくる腹をおさえて彼は、「大変よく知っています。あなたは魚屋だ」とあくまでも狂気の偽装を続けて答える。腹の立つハムレットと、ポローニアスという大きな魚が釣れそうであれしくてならないハムレット。お前は人もあろうにこのハムレットを釣ろうとしているが、釣るのはこつちだとよろこぶハムレットと、どうもクサイ、おのれポローニアス奴! 王クローディアスと共謀しているな! と考えるハムレット。「魚屋」(Fishmonger) は魚屋だが、当時「淫売宿の主人」の意味にも遣われたことは今日よく知られ

ている。魚屋というのも十分唐突であり、狂気偽装の目的には十二分に適うが、淫売宿の主人というのはそれに加えて実に激烈なアイロニーであり、ハムレットの大胆な挑戦である。ポローニアスが淫売宿の主人なら、その娘オフィーリアは売春婦ということになる。ポローニアスは単に「私はさようなものではございません、ハムレット様」とだけ答えている。彼が「淫売宿の主人」まで考え及んだかどうかは、彼自身に訊ねてみるよりはかに方法はない。おそらくは次の彼の傍白などから考えて、彼の理解は魚屋にとどまっていたと考えるのが最も妥当なところだろう。

王クローディアスとポローニアスとは、ハムレットとオフィーリアとをロビーで会わせて、壁掛のうしろから観察し、ハムレットの狂気の真の原因が、果してオフィーリアかどうかを探ろうと相談し合ったばかりである。ハムレットの鋭敏な直観力は、おそらくは何かがあると感じとつたのである。そうでなければこうも唐突で、烈しい言葉をポローニアスに浴びせることはしないだろう。それが何であるかは、はつきりとはもちろんわからない。「魚屋」、「淫売宿の主人」は、いわばそのはつきりわからない魚を釣るエサであると言えるのだ。魚がいれば、これでうまく釣れるかもしれない。ハムレットの風刺ともアイロニーとも言えるこの複雑な「魚屋」は、こういう大胆な挑戦であった。イギリスのシェイクスピア学者ドヴァー・ウィルソン(Dover Wilson)は、ハムレットは王とポローニアスの密議を立ち聴きしたに違

ない、そうでなければ彼のこの激烈にして唐突なセリフは理解することができないと考えている。そのためにウィルソンはそのテキストでは、二人が相談をしている一五九行あたりでハムレットを舞台の奥の方に登場させ、二人の話を立ち聴きさせている。そして王、王妃などが退場したあとで、彼を舞台の前面に再登場させるのである。ウィルソンによれば、もともとシェイクスピア自身のテキストにはこのような二重の登場があったのであるが、後の人が二度の登場はおかしいと誤解し、前の方のを削ってしまったというのである。しかし無理に二重の登場をさせる必要は決してないだろう。否、ハムレットに二人の相談をはっきりと立ち聴きさせてしまつては、このあたりの悲劇的な雰囲気 unnecessary に単純化し、「ハムレット」全体の悲劇の型を根本的に損つてしまうと言えるのだ。「ハムレット」では、すべてはエルシノア城の夜の霧に包まれている、亡霊自身の正体もわからない。正体がわからないのは亡霊ばかりではない。ハムレットには自分自身の正体さえわかりかねるのだ。ハムレットの悲劇がここにあり、われわれの悲劇がここにある。

「魚屋」のセリフが投げかける問題はまだこれにとどまらない。現行の「ハムレット」のテキストの元になっているものに、一六〇三年出版のいわゆる「第一の四折本」(First Quarto)、一六〇四年または五年の「第二の四折本」(Second Quarto)の最初の全集版である一六二三年の「第一の二折本」(First Folio)の三種類があることは周知の通りである。

最初の四折本は地方巡業の劇団が役者などの記憶から再製したもので、第二の四折本がシェイクスピア自身の稿本を土台にしてつくられた劇団の台本から印刷されたもの、と今日一般に考えられている。つまり「第二の四折本」が今日最も信頼すべきテキストと考えられているものであるが、これにはまだまだ異論の余地がある。たとえばその一例がこの「魚屋のシーン」にある。「第一の四折本」では、王や王妃が退場したあとただちに三幕一場の例の *"To be, or not to be"* の独白が続いている。そして「魚屋」の問答は三幕一場一六一行付近に続けられている。こうすると「魚屋」は前述の「尼寺へ行け」に続くことになり、「尼寺」から「魚屋」へと淫売宿の意味は自然に流れることになり、この「魚屋」のセリフはさほど不自然ではなくなるわけである。こういうところから「第一の四折本」もシェイクスピア自身の稿本によるものだという説をなす学者も多い。しかしそれはここでの問題ではない。ここで問題としているポイントは、「魚屋」のセリフがそれほど唐突にして不自然、不適切であるかということであり、もし「第一の四折本」の如くに入れ替えれば問題はすべて解決されるか、ということである。つまり「魚屋」を「尼寺」の次に持つてくれば、「魚屋」は唐突ではなくなるが、「尼寺」の方はどうかということである。ハムレットが「尼寺へ行け！」と怒ったのには、もちろんそれだけの理由、徴候があった。彼が前にオフィーリアに与えたプレゼントを、今の今、ことさらに彼女はかえそうとしている。

そういえば彼女のセリフも、ことさらにとってつけたように、格言めいたことを言ったり、韻をふんだりしている。彼女が父親の犬となっていることは、ハムレットには歴然たる事実となった。かくして「尼寺へ行け！」である。しかしながら、このようにしてたどったハムレットの感情の線は、あくまでもハムレットの直感力による判断であって、彼が直接にオフィーリアに聴いたのでもなければ、また彼等親子が相談するのを立ち聴きしたからでもない。すべてはハムレットの直感力である。それならば、とくに「魚屋」のセリフを後に持つてこなくてはならぬ理由は無いではないか。同じ直感力によるならば、「尼寺」が先でも「魚屋」が先でも、要するに五十歩百歩だと言わざるを得ない。

前に戻ろう。「あなたは魚屋だ」というハムレットの言葉に、ポローニウスは「いいえ、さようなものではございませぬ」とポツリ答える。それならばとハムレットは更に、狂気の偽装とも大胆な挑戦ともつかぬカマをかける。「ではあなたも魚屋くらい正直（“Honest”）だといひ」というのがハムレットのセリフである。「Honest」には「オセロウ」における用法と同じに、「正直」「貞節」、その他の意味がある。

しがない魚屋だって、お前に比べればずっと誠実だ。しかもお前は一国の運命を担う総理ではないか。魚屋ならぬ淫売宿の亭主だって、お前のようなウラハラは無いのだからずっと正直だと言える。ハムレットの真意を探れば、そのように説明されるだろう。ポローニアスの立場からは、ハムレットの

この言葉は唐突以外の何ものでもない。娘オフィーリアにふられた為にハムレットは発狂したと思いついでいるポローニウスにとっては、あるいはそう思いこみたいポローニウスにとっては、これもあさましい狂気の言葉と解釈する以外に方法はなく、また彼はよるこんでそう思いこんだに違いない。狂気の偽装という第一の目的は、これでいとも容易にかなえられたわけである。

しかしながらここで完全な気違いと結論されてもハムレットは困るのだ。クロードディアス及びポローニアスの立場からすれば、ハムレットは果して狂気なのか、それとも正気なのか、狂気ならその原因は何か、要するに正体はわからない。ハムレットの側でも事情は同じである。これら二人組にしても、亡霊にしても、すべてその正体は明らかにはわかってはいない。「ハムレット」の悲劇は要するに、こういうあいまいの霧の中のお互いの暗中模索だとも言える。そしてこのあいまいに耐えかねて、相手が暗ヤミの中でシュン動を始めたとき、そのときこそすべてを包むあいまいは霧散して、情勢はすべてはつきりと把握できるのだ。そのときまで待たねばならぬ。すべて黒白をハッキリさせてはならない。すべては灰色の霧の中に保留しておかねばならない。ハムレットが狂人と結論されることは、以後の彼の行動範囲がいちじるしく、機械的に狭ばめられることを意味する。それはハムレットにとつては致命的である。これが「正直」という一見したところ何の論理性も無い、単なる狂気の言葉のウラに、上述

のような大胆な挑戦を含めた理由であろう。単なる狂気の偽装のためというなら、ほかにもっと非論理的な言葉がいくらもあろう。このような風刺とも皮肉とも言えるトゲのある言葉である必要はない。頭のよいポロニアスのことであるから、ハムレットのこの裏のトゲは、あるいはチクリときたかもしれない。しかしそれも、おそらくはチクリだけでとどまり、大きな発展を示すことはまず無いだろう。ポロニアスには要するに結論は出せないのだ。彼は「正直ですって？ハムレット様？」とまたポツリ問いかえすだけである。

「そうです。このごろでは正直者は、一人に一人あるか無しかです」とハムレットは続ける。ポロニアスにはハムレットの痛烈なアイロニーは通じない。しかし一般論としては、これはまことによく通じる。ここではハムレットの言うことはマトモであり、義理にも彼が狂気などとは言えたものではない。ポロニアスは文字通り上げられたり下げられたり、彼はただ「まことにその通りでございます、ハムレット様」と言うほかはない。観客の立場からすればこれは痛烈なドラマティック・アイロニー。作者シェイクスピアのレヴェールのアイロニーとも言える。かくして観客はハムレットを中心とした四囲の客観状態を次第に明確に把握してゆくのだ。ハムレットの痛烈なアイロニーも、ポロニアスにとつては蛙の顔に水と受け流されてしまう。ハムレットは話題を変えるほかはない。ハムレットは続ける。「というのは(世の中に正直者、貞節を守る人がいないというわけは)、もし太

陽自身が犬の屍にうじ虫をわかせるなら、太陽は屍に口づける神だから——ところで娘さんがおありですか？」太陽がうじ虫をつくり出すという考え方は当時ふつうに言われたことであつた。このセリフの後半は条件文で途切れているが、もし続ければ「太陽にも比べられる王子のこのおれは、屍同然の淫売女のお前の娘にキスして、うじ虫同然の子供をつくり出せる」というようなことになるだろう。いまはそういう世の中だから、正直者、貞節を守る人などは一人に一人いるかないかだというのである。ハムレットはもちろん太陽を自分になぞらえ、屍(“carion”)をオフィーリアになぞらえているのだが、これはポロニアスにわかるはずはない。ハムレットの狂気の程度は相当にひどい、とポロニアスはまだ考えるだろう。ポロニアスのげんな面持。これを見てとつたハムレットは、すかさず「娘さんがおありですか？」とエサをつけかえるのだ。これはポロニアスにもわかりすぎるほどよくわかる。娘オフィーリアのことは、片時といえども彼の念頭を離れたことはないのだ。「わたしの娘」という表現が、いったい何度くらい彼のセリフに出ていることだろう。これはポロニアスを釣るのに、絶対にまちがいのないエサである。ハムレットはそれをよく知っている。「はい、ございます、ハムレット様」というポロニアスの生き生きした答え。

しかしポロニアス釣りに懸命になっているハムレットは、「娘」(恋人オフィーリア)をエサに糸を垂れている自

分自身の姿には気がつかないのだろうか。「娘」を持ち出したのはもちろんハムレットの意識的な計算であろう。しかしわれわれ観衆の立場からすれば、ポロニアスを含めて、ここでハムレットの思考が「娘」（恋人オフィーリア）のことに及んだということは、決して単なる計算としてだけで看過することはできない。やはり無意識的にはあろうが、ハムレットもオフィーリアのことを片時たりとも忘れることはできないのだ、というアイロニカルな見方が決して不可能ではない。ポロニアスがとびつくエサは、同時にハムレット自身のお気に入りのエサでもあったのだ。次のハムレットの複雑なセリフは、フロイドの精神分析にまつまでもなく、彼の一種の情緒発散であることは容易に理解できよう。

娘があるかという問いに、ポロニアスが水を得た魚のように生き生きとして、「はい、ございます」と答えると、ハムレットの次のセリフはまたクイズだ。

娘さんに日の当るところを歩かせないように。世間を  
知るといふことはありがたいのですが、娘さんはオ  
トコの味も知ってしまうかもしれません。だからよく  
気をつけて下さい。

(Let her not walk i' th' sun. Conception is a  
blessing; but as your daughter may conceive,  
friend, look to 't.) (II. ii. 184—186)

犬の屍に日の神がキスしてうじ虫をつくり出すように、デンマークの王子である自分（sun」とson」との当時ふつうな

言葉のあそび）に近づけると、うじ虫のように子供をつくり出しますよ。「教会での神の祝福からはなれて、世間の日に当って墮落する」(Out of God's blessing into the warm sun)ということわざもあります。そう明であること、懐妊することは共に神のありがたい祝福であります (conception には「そう明」「利発」と「懐妊」の両義がある)。しかし娘さんがそう明だと懐妊するかもしれないから、よく気をつけなさい。ハムレットのセリフをふえんすれば、大体このようになるだろう。これを言うハムレットの立場を考えると、もちろんまず狂気の偽装がある。しかし単なる狂気の偽装だけが目的なら、以上にその筋をたどったような、まことに複雑で、しかも論理の通ったキワどい芸当をやらなくともよいのだ。これにはもちろん、誰が考えてもわかるように、ハムレットの第二のレヴェル、彼のアイロニカルな大胆な挑戦がある。ポロニアスはおそらくはまた、ハムレットの狂気の原因は娘オフィーリアへの受けいれられない愛で、もしかするとハムレットとオフィーリアとの結婚は実現するかもしれないと考えているだろう。これはこのようなはかない希望をいだけポロニアスへのハムレットの断固たる申しわたしたと考えられる。尚アイロニカルにとれば、これはハムレットがわれとわが身に申しわたしている言葉ともとれるのだ。

これに対して、これを受けいれる方のポロニアスの側はどうだ？ 彼は傍白で次のように言う。「やッぱり、わしの言った通りじゃないか？ くどくどと言っておるが、娘のこと

ばかりだ。だがはじめはこのわしがわからなかったぞ。わしは魚屋だと言った。ひどくいかれておるぞ、ひどくいかれておるぞ。ところで実のところ、このわしも若いころ身におぼえがある。大体これと似たりよったりだった。もう一度話しかけてみよう。」これを文字通りに解すれば、彼にはハムレットの真意はほとんどわからなかったと言える。いや、わかつたの真意はほとんど言わなかった方がいいかもしれない。頭の回転の早い彼のことだ、全部とはいかないまでも、すくなくともハムレットの挑戦的な態度の一端ぐらいはわからぬはずはない。しかも他のすべての言葉、態度に目を蔽って、ハムレットの投げかけるエサ「娘」に、貪欲なダボハゼの如くに食いつき、ハムレットのすべての言葉は狂気のためと我田引水的に納得してしまうとは、彼もさすがに年令はあらそえないといふべきか。しかし、これはあくまでも彼のセリフの文字通りの解釈である。言葉ではこう言い、あるいはこう言っていて自分納得させようとはしているものの、彼の心の奥底には、やはり何かシコリが残っているのだ。何か釈然としないものがあるのだ。その証拠には、「もう一度話しかけてみよう」と言っている。これでハムレットはポロニアス釣りに完全に成功していると言える。ハムレットは完全に狂気だと、ポロニアスにはつきりと結論を出されては、ハムレットの敗けである。クローディアスもポロニアスも、あくまでも、じらしておかなければならない。そのうちに彼等も、しっばを出さう。ハムレットがおかれた悲劇的な環境では、こ

れは敵の企図を察知するのに役立つ徴候、情報を手するためのおそらくは最良策と言えるだろう。

それにしてもハムレットは、何故こんなひどいことをポロニアスに言うのだろうか。唐突なヒュ、陳腐ではあるが複雑な言葉のあそびなどで、二重三重に真意は隠蔽されているとはいえ、オフィーリアについて、その父親ポロニアスにこれほどの罵言を浴びせなくともよいだろう。われわれはこの点で、ハムレットの心理状態について、何か釈然としないものを感じないわけにはゆかない。このシーン冒頭の「魚屋」から統括しているエロティックな含蓄は、ここにいたってクライマックスに達したと言えるが、ハムレット自身の心の一隅にも何か不純なものがあるのではないか。心から尊敬してやまない亡き父、前国王のハムレット、いまだ正体のはつきり扱えられない亡霊、どうやら復讐の相手となりそうな国王クローディアス、そのうるんクサイ言動、国王のイヌともいふべき憎い憎いポロニアス、愛するオフィーリア、しかし国王のイヌのポロニアスの娘としては憎いオフィーリア、あれほど心から信頼していた母親も、何か納得できない点がある。殺してやりたい二人のイヌ、ローゼンクラッツとギルデンスターン、——千々に乱れるハムレットの物思う心は、その行方を知らないのだ。ハムレットの悲劇的な窮状はよくわかる。オフィーリアに愛を拒絶された為に発狂したと思わせるために、彼が懸命になって狂気の偽装をしているのだということもよくわかる。しかしそれにしても、ハムレッ

トの自己陶醉的な態度、サディズム的な言動はどうだ？ 明敏なハムレットのことであるから、彼が自分の演技過剰に気がつかぬはずはない。その彼が、唐突にして難解なヒュ、アイロニーに自己をトーカーイして、この過剰な演技を続けてゆかねばならないのだ。

いわば苛酷な現実からの一種の逃避であるかもしれない。

一種の自己逃避と言えるかもしれない。しかしながら、理想と現実、外観と実体、生と死等々——われわれすべての人間がそれによって生きてゆくことのできるわれわれ自身の主體性というものを、われわれが生きている限り、われわれが生れた瞬間から遭遇しなければならぬという矛盾のギャップに見失ったとき、死と狂気とを除いたら、いったいわれわれには、いかなる生きる方策が残されているのだろうか。

“To be” と “not to be” とは正反対の概念である。しかもそのいずれもがわれわれをとりまく厳然たる事実だとしたら？？ その何れか一方をとり、他を捨てることは簡単である。しかし、それが矛盾の解決策となり得るはずがない。正反対の概念であるが故に、いかなるセツチュウ案も厳密な意味での解決案とはならない。しかもこの矛盾のギャップにおちこむわれわれの運命は刻々と迫っているのだ。いっそ一思いに自殺することができたら？ それともほんとうの気遣いにでもなれたら？ それこそわれわれが心から望むところだ。しかし発狂も自殺もできないとすればどうすればよいのだ？ それでもわれわれが生きているとすれば、われわれは

われわれ自身の立場、観点、次元を変える以外に道は無いではないか。現実の苦悩を全く超越してしまうというのではない。アイロニー、ヒューマール、風刺、ヒュ、言葉の遊び、各種の演技などの複雑な態度により、現実に対する洞察力を増し、かくして現実を超越しようとする血みどろの生きる努力である。生きるとは、このような絶対絶命の場所で苦しませられにもがくことであり、またその逆に、こういう苦しませられの演技、動作自体が、われわれが生きているということなのである。ハムレットのアイロニカルな態度は、要するに、彼に残された唯一の生きる道であり、彼の唯一の自己創造の姿である。

ポロニアスの第二の訊問がはじまる。彼はもう半ば釣れてしまったも同然である。第一の質問は「私奴を御存じで？」という人を小バカにしたものだったが、第二番目のも同じようなものだ。ハムレットは第一の場合と同じような芸当を、もう一ラウンド繰り返さなければならない。この死ぬほど退屈な奴め！ ハムレットは本を読みながら登場しているのである。常識の見本のような男ポロニアスにとっては第二番目の問いは決まったようなものだ。「何をお読みでございますか、ハムレット様」というのが彼の問いである。これに対するハムレットの答えは傑作である。ハムレットは全篇を通じて実に数多くの、この種の芸当でわれわれを楽しませてくれるが、これはなかでも傑作中の傑作だ。彼はゆっくりと三歩前進しながら、それに調子を合わせて「ことば、ことば、

ことば」(“Words words, words) と三度繰り返すのだ。

本であるから、読んでいるのは単語、ことばには違いない——ポロニアスは考える——しかし何というバカな答えだ、ハムレットは、やはり相当にイカれているのだ。「どうい議論の本でございませうか、ハムレット様？」ポロニアスはすかさず問い返している。「議論、けんか？ 誰と誰とが？」とハムレットはまた脱線。「お読みになつて本の内容をうかがつていたのでございませう、ハムレット様」ポロニアスは子供をあやしているつもりである。「議論」は“matter”の訳であるが、これには「本の内容、主題」の意と、「けんか口論の題目」の意との両義があり、ハムレットはこれを利用してポロニアスを振りまわしているのである。

「三」という数は、当時ふつうの魔の数だ。「ハムレット」で亡霊があらわれるのも三回だし、「マクベス」の魔女は三人だ。“Except my life, except my life, except my life”については、すでに述べた。「ことば」という意味を伝えるだけなら一回ですむ。強調が目的なら二回ですむ。ここにはハムレットの、何とも言いようのない不気味な脅迫、挑戦が秘められているのだ。娘オフィーリアをオトリにしてこのおれを釣ろうとしているが、お前こそ「娘」という「ことば」で、ダボハゼの如くにいとも簡単に釣られてしまったではないか。この死ぬほど退屈な常識のかたまり奴、俗物奴！ さつさと消えてなくなれ！ ハムレットの三步のテンポのシン

ポリズムには、こういう意味の脅迫が考えられる。ハムレットのこういう脅迫、挑戦の態度は当然、次の“matter”の「けんか口論の題目」のアイディアに連続してゆくのだ。それは更に、ハムレットが読んでいる本の作者ジュヴナル(Juvenal)の風刺、ハムレットのポロニアスに対する風刺、そして結局は「命をやる！」の最後の脅迫へと続き、このあたりハムレットの基本的な態度となつてゐるのだ。否、「ハムレット」全体の一つの基本的な悲劇の型となつてゐるのだ。

ハムレットにとってこのあたりで最も大切なことは、彼自身の言動についていかなる種類にもせよ、ポロニアスに結論を出させないことであることは前に述べた。ポロニアスの突進を何とかイナして、彼等が別れるときポロニアスのハムレット認識は、要するに、このシーンのはじめに比べて何の進展も示さないようにしておくことが大切なのである。依然としてサスペンスの中に居るしておくことが肝要である。そうすれば、そのうちに何とかもがきたさだろう。そこがハムレットの狙いである。しかし、そのサスペンスの状態はいかにしてつくり出せるだろうか。ハムレットがとり得る唯一の方法は、彼のお得意ともいふべき「ことば」の芸当だ。アイロニカルな含蓄、言葉のテンポのシンポリズム、言葉のあそび、故意の表面上の非論理性と内面的な論理性等々の複雑な「ことば」の技巧を自在に駆使して、ポロニアスを奔命に疲れさすことであつた。そしてハムレットは見事そ



れに成功することができた。しかしながら人間の「ことば」の持つ宿命として、「ことば」を自由に操っていたはずのハムレットが、いつか逆に「ことば」に操られていたとは何たる皮肉であろうか。「ことば、ことば、ことば」はポロニアスに対するアイロニーであると同時に、それはハムレット自身に対する痛烈なアイロニーなのである。「To be, or not to be」の人類はじまつて以来の「ことば」のディレンマにおちこんで身動きのとれないのは、ほかならぬハムレット自身であるからだ。そしてそれはとりもなおさず、われわれ自身の姿だと言えよう。

「ハムレット」は「ことば」の悲劇とも言えることができる。そもそも国王クローディアス自身が、一幕二場のはじめの部分における彼のすばらしい「ことば」の技巧でわかるように、「ことば」の達人である。ポロニアスが自他ともに許す、その道の名人であることは万人の認めるところである。一幕三場のおわりの部分で彼が娘オフィーリア相手にその至芸を披露し、終にはサルも木から落ちるようなテイタラクに相成り果てたのは、彼が「ことば」を飯よりも好んだ証

拠であろう。チャンピオンはもちろん主人公ハムレットで、彼は断然他を圧している。「ハムレット」はこれら三人の「ことば」の名手が演ずる「ことば」の悲劇である。お互いに、二重三重の意味を持った複雑な「ことば」を駆使して、相手をその「ことば」のワナにかけようとしている。その二重三重の意味、含蓄のすべては相手にはわからないし、多くの場合自分自身にもわからない。それぞれが自分自身に都合のよい意味で「ことば」を遣い、相手の「ことば」を理解している。お互いがエルシノアの夜の黒い霧の中で、意味の暗中模索をしあっているのだ。相手の正体を見極めるために、そして何よりもまず自分自身の正体を見極めるために。ハムレットのポロニアスやクローディアに対する挑戦的なアイロニーは、結局のところハムレット自分自身にかえってくるのだ。アイロニカルな態度をしようと、どんな「ことば」の芸当を演じようと、問題は要するに解決されそうもないことは、はじめからわかっている。しかもわれわれはそれを演じなければならぬ、われわれが生きている限りは。